

## 2025年11月 青山学院高等部「生物基礎」

青山学院高等部1年生10クラス420名「生物基礎」の授業で、今年度も「プレパパ・プレママ教室」の実践をさせて頂きました。例年、新たな発見があり、前年度の授業評価をもとに授業内容を改善しています。今年度は、共に地域で生活する仲間であることが伝わることを目的として、遺伝教育プロジェクトと対象となる障がいのある子やご家族とのつながりについて追加しました。

「授業前は関係ないと思っていたけど、将来の自分に大切なことだと知った」「授業後に自分なりに調べて、考えるべき課題がたくさんあることを知った」「模擬検査の意思決定が難しかった」など難しい課題に真剣に取り組んでくれました。



偶然だったのですが、昨年度、この授業を受けた生徒さん（現・2年生）にお会いする機会がありました。お声がけしたところ「トリソミーの先生」「赤ちゃんの授業」と、たった1回の講義なのに、覚えてくださっていて、本当に嬉しい出来事でした。また新たな力をもらいました。

2023年施行のゲノム医療推進法では、国民の遺伝・ゲノムリテラシー向上に向けた取り組みが謳われており、認定遺伝カウンセラーは、その役割が求められます。今回は、本学修了生 尾道が授業全体の担当の独り立ちができました。以下、尾道が実践の振り返りについて、報告します。

青山学院高等部1年生の皆さんとともに、遺伝講座「プレパパ・プレママ教室」を通して、遺伝について考える機会をいただきました。これまで授業の一部を担当する立場でしたが、今回は初めて冒頭から最後までを担当し、講義進行に伴う責任や難しさと同時に、生徒さんと共有した時間の貴重さを感じる1日となりました。

講義は、生徒さん自身に「自分が妊娠している立場」あるいは「パートナーが妊娠している立場」を想定してもらうところから始まります。サイコロや棒くじを用いて陽性判定を疑似体験し、その結果を踏まえてグループごとに討議してもらいました。実際に陽性・陰性の結果を目の当たりにした生徒さんからは、「事前に知ることによって備えができる」という意見がある一方で、「検査に伴う身体的・心理的負担」や「結果を知った後の選択の重

さ」に思いを巡らせる声が聞かれました。また、身近な家族が出生前診断を受けたときの経験について語る様子も見られました。検査の限界や、決断の難しさについて活発に意見交換をする姿から、遺伝情報のもつ特殊性や重みについて、生徒さん一人ひとりが自分ごととして受け止めていることが強く伝わってきました。この時間を通して、一方的に知識を伝えるのではなく、対話を通して共に考えることの意義を実感しました。

終了後は、高等学校の先生方とも意見交換を行い、教育現場でこのテーマを扱う意味や伝え方の工夫について多くの示唆をいただきました。遺伝学的検査がより身近になる社会において、唯一性、多様性を尊重しながらも、自らの意思決定について主体的に考える力を育むことの大切さを深く考える機会となりました。今後も、遺伝について考える学びの場を丁寧に積み重ねていきたいと思えます。

大変、貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

<尾道 千尋>



文責 森藤香奈子